



Handwritten Japanese text on a yellowish paper label, likely the title of the book. The characters are written vertically in a cursive style.

^ 13
3336
5



へ 18
3336
5

斐艶匠物語卷之五

○びさりんでん

六五十年八月廿九
本大學出版部

猪名部の墨繩ハ都子のがりつま山人は別きて一所ヲ修めしを願礼して
五幾内のわたりをいづる所ニ堂社の造管ありしは一日昔とすま
て匠等がキチあまりつ事をも作りて力をたまけつりたる常の
匠どもが五十日もひまどるづき業を一日ぞり丹作りて々々をあげ
おどろきでわめの者多くて墨繩が名まき世は高くびぎたる
松師とあつてつきそひをりくま今ハ比類なき上手の所
とぞありたる墨繩かくありきて半年をりを経たるが山人が身の
おどろきなきが例の松光を具して又都へのがりて山人を尋ねたるは山人
大内のひんまきの衛士とあつてありたる丹行ありしを志むりかたし

匠師

山人

造管つらうまつらんいふかといひ匠等さていふ事一かりあんまらうば
との舟あちてたまけくめんとて誘ひてゆく墨繩匠どもが卧ちるふよ
入りて見らる病よんでうあまをさる目もあてらねど先ずころより
蒺藜枝とり出く煎ドナせくのまま切内匠つらうも其よらうつらう
翌日より墨繩松光造管の役所に入をいこちと作れまらる舟五十八
むらりの病者ども蒺藜枝を煎じて飲ゆるより精神さるやまぎをすひをも
忘れぬとてまおちつて墨繩はよろこびをいふ墨繩が修練工夫をん
人の知づまあはねどけいびの造管百人の匠等が集りて一年を經とも
成就あらゆめとありといひありし墨繩松光が入来より三十日を
経ぎしては造管のころなく出来てまらるあやうあう彫物あは草本
鳥獸のかしちまぐまらるがはくつらうありとせしめありある匠どもら

さうあり匠つらうさく見發きて宿多力かあき神仙のたりまらる
あぶらとらひもあらありたりかくて都よまほひてあかこの寺社の造
管あるふ子到りて匠ら舟よりて其職をさけつらうらら其は百濟国より
繪をよくまらる人ありけ繪師墨繩が藝多神妙ありと少てねここて
舟おひて云々の墨繩とて匠の道舟とありとも我繪あり及ぶうだ
かまをおどして見んと云く一日墨繩をよびまらるる墨繩使と共よ
まりて廊のありどもを引明ていんとさる舟壁は墨と墨繩とさる
男のうらなるさるをぶさるの扱ひをせをりて其道ふらまらる
まらるありたりかまらる世よまらる人あり耻見せんの中ありと思ひ
自舟子袖をあてあまむづらうたがらとらひて途出るぬりぬ其後か
百濟人まらる人よからうて墨繩がたくみ我画を省りぬとくふらるるを

造管つらうまつらんいふかといひ匠等さていふ事一かりあんまらうば



ひび
飛弾の匠
百餘人と
ザイ
藝直を
あ
ま

五月廿一日 寄言卷之五

墨繩の首のあつて其の首を墨繩にひく。はつぱり其の報答せんといふ。
 百濟人のいふ使を舟りてあつてあつたぬよおせせといふ舟りてあつてまへ
 々の使のいふふき堂のそば一葉のこゝにせりていふふき堂の
 うしろの首のいふいふ堂四面の戸を明てあり百濟人縁子のかりて南の
 戸よりいふふきとまへ其の戸をいふ開ぬおどろきめづりて西の戸よりいふ
 とまへ其の戸をいふ開て南の戸の明ぬ北の戸よりいふとまへ其の戸を
 戸を開て西の戸を開て東の戸よりいふとまへ其の戸を開て北の戸を開ぬ
 かあまゝいふふきとまへ開つひきまゝいふ人事を得ぬねまゝいふ
 かまゝいふふきとまへせんまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ門を
 とまへて錯おろしてまへあつていふふき門のあつていふあつていふ
 思ひて行くはけふ門のいふ横らうていふあつていふあつていふあつていふ

てまゝいふ男の死するあり白ひき鼻をうちて堪がらうりていふ
 け門より外に出き道はあつてまへ裾をかきつけてけ門をまゝいふて通せん
 まゝいふまゝいふいふ男の手をおげて百濟の裾をいふいふいふいふ
 まゝいふまゝいふいふいふ事とまへあつていふいふいふいふいふ
 声をいふまゝいふ墨繩おつていふいふ何事とまへいふいふいふいふ
 くのいふいふいふいふいふ事とまへいふいふいふいふいふ墨繩いふ
 する事いふいふいふいふいふ見せるをいふ見せるをいふ見せるをいふ
 みていふいふいふいふいふいふ心のおいふいふいふいふいふいふ
 心づきぬおどろかふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 墨繩の邪法切術を行ひて人の目をくらふ物とまへいふいふいふいふ
 事捨非違使の聴きまゝいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

禮してゆき道をがら病者を見せむは本尊をひくまをがませせてゆき
 ひとくしてとみ病愈ざる者ゆきせよ世に希有の冥佛ふておたまよの
 りづー用きて帝の病癒がとよまさせぬを其まゝ一ゆひあんとやすいと
 りまてき事あり。とくは佛内子をまとして使出しくまて法匠をを
 か一夫の曹司子入きて物くさせよあぐ仰せあるわどは法師いづちの母を
 行方見せざありぬくあかこめあぐまどく方志まじりたりお師
 使ハ内子あつて内侍のかまへまどくとゆるる子内侍は佛合龍をとりて
 屏風のめと出る其時帝の病癒あそろし鬼どもあま集りてあや
 ませなるをびびりとおがー入りくるあがまりの鬼ども俄に手まどい
 志てさびぎふるひていひくるは墨繩が作りを身するひさめん天入りまらせぬ
 いろ丹せんといひ出よいひする木の葉のちるゆる丹まらしくとあのかか
 逃て出ぬとあつては目さめては覚あまは只今は枝がとまづいひまら
 さもをりてあつては地まよまてあやせぬひては洋らしくようまらせ
 とのめあ女一の宮の病癒あつてはまらせぬひては手あやしてついで
 屏をのひておらるる見よまたらまどく降魔の尊像をおたまてあや
 じむあつてはまらせぬひて墨繩とゆる者今世子ありや民部子仰せてとく
 まけとのめあ其夜あつては名部の墨繩とや物お弾の国の匠あつて
 ゆが今獄屋子あつてはとやまよ帝驚らせぬひてとくよべとのめあ女一の
 宮も帝の病癒をてせぬひてはまらせぬひては感のめあ志ありては
 法師の事あつてはまらせぬひては帝の疾おとて感のめあ志ありては
 人墨繩ををて階下あつては帝あつてはまらせぬひてはあれは汝が作ら
 法佛あつてはまらせぬひては墨繩さんゆとやせむさるは何者あつては

逃て出ぬとあつては目さめては覚あまは只今は枝がとまづいひまら
 さもをりてあつては地まよまてあやせぬひては洋らしくようまらせ
 とのめあ女一の宮の病癒あつてはまらせぬひては手あやしてついで
 屏をのひておらるる見よまたらまどく降魔の尊像をおたまてあや
 じむあつてはまらせぬひて墨繩とゆる者今世子ありや民部子仰せてとく
 まけとのめあ其夜あつては名部の墨繩とや物お弾の国の匠あつて
 ゆが今獄屋子あつてはとやまよ帝驚らせぬひてとくよべとのめあ女一の
 宮も帝の病癒をてせぬひてはまらせぬひては感のめあ志ありては
 法師の事あつてはまらせぬひては帝の疾おとて感のめあ志ありては
 人墨繩ををて階下あつては帝あつてはまらせぬひてはあれは汝が作ら
 法佛あつてはまらせぬひては墨繩さんゆとやせむさるは何者あつては



飛騨の匠
つくね
毘沙門天
あつらひ
悪神を
追つ
りふ



つるし回ナせのよは墨繩各々ういおの国は武義の国よゆとまて石濱のつる
あーヤ 船主が為よ。つくりてあへんゆ。しんまま。店門のほろろりよ。ま
てぬふりと。しんやま。相事の子細く。しんやまのひて世に稀ある匠
あり。まろ。代よ。かる物の上ま。しんまの世のしあふら。まろ。まろ。おめて
おこしやる心地さ。かる物を囚ふ。あへん。しん。ま。あ。ま。り。とて。別當を
勘づぬ。別當面目を失ひ。引あゆ。ぬ。帝はよう。びのあま。り。墨
繩を。あ。ま。た。く。み。づ。う。は。し。は。じ。の。ひ。薄。敬。の。事。大。方。あ。ま。り。墨
け。あ。ま。の。う。み。子。引。て。面目を得て。ま。り。あ。ま。り。ま。ろ。山。人。松。丸。も
待。つ。け。わ。て。よ。ろ。あ。ま。事。の。ぐ。更。あり。かの百済人。お。あ。く。や。お。り。ひ
く。ん。行。る。あ。く。跡。を。か。く。て。逃。ま。き。ね。と。ど。け。百。済。人。を。今。昔。物。語。子
百。済。川。成。と。記。せる。い。は。く。の。異。あ。ま。あ。り。又。飛。彈。の。匠。と。の。ま。ろ。て。

姓名を記さざる。ありある故よりしらざる。

○よめの法師

更者だしの女の宮の年ごろ佛の道をのこま。しん。せ。の。ひ。て。し。り。て。お。め。ひ
お。い。く。髪。を。も。お。ろ。山。寺。よ。か。ま。あ。の。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
の。の。ろ。ろ。を。父。帝。あ。ま。は。事。あ。つ。う。ま。い。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
後。は。悔。の。時。あ。ま。の。の。ひ。て。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
春秋の花紅葉を流覽さる。ふ。も。た。世。の。常。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
の。か。ら。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も
あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も。あ。ま。の。事。の。法。は。お。ろ。び。あ。も

ふむうま人を見ゆひてよりひままぢうはこいとおひひのいどもさりあま
 るのおのけのこふささごうせ子あいんも定ちがたとい似
 くる人ありともし所こせまあはいうで逢見んよさぐあんあまあり子
 生まはりて心よつね夫まうけくおぢまあまき世子何んより尻ゆう
 ありてあそありめとひささう子思ひ定めてぞおをしる常ち墨墨繩を
 畏おしのつあまの常舟はかこりり舟召て物造らせては賢ぎあまの造れる
 物の中子おうま猫の生るまといくをいくでせめひく
 墨墨繩子ゆせて娘宮のまのこ近うまるせめの女房達け猫をとりて
 唯宮舟見せまうさるまぢまをまるまあの猫はたがりまとさりく
 白くさせめの墨墨繩人の笑ひあまの声のままぶく何んあくまま
 のあひよりさのまま見まじび繪がまいくんある娘君の机丁舟

そひておをしはかさはかさらう子ままあの鯉の甚まはまままてお成て
 あり目をつけて見まじび仙界あまの見したがまま若きおの人の猫
 子は葉子ゆりて墨繩が前はゆてまる舟の鯉のう舟して得まり
 といくか娘宮の生まのり時は屋の棟は落ちてやりをまあ
 りひてより常舟は傍をあまままさごう物あままありく
 おいけ娘宮なんあらおさせがりくま思ひてまうり出て後男の仙人の
 かこちを其ま舟らうしとりて娘宮のゆまりね娘宮け像を見ゆま
 あまのまありあまく諸ひと見ゆる男のかこちまたがし示さるま
 だ大舟歌うせのひて墨繩をまの舟わてままらある人のかこちま
 尋ずせめの墨繩がいくけ人形の宮はまませめのは男が君あまま
 かせだ娘宮ままらうよういせめの舟舟思ひあらういつと墨墨繩



やまがとひめ
 山人の
 山人の
 思ひ入り
 しの
 よるを
 夜居の
 法作
 見つけ
 山人を
 とら
 ち



几帳のひはより。むまびくろをさへ入つ。姫宮あまききてあげかつ。ぬはくろ。
 から事たびくはありなまびく。一族のさぢあまびく。人ぎくも苦くおがく。
 人もものぬをけ法師。のみお丹思ひて折く。たまぬのささあまびく。
 引く。事あまびく。あまびくも。姫宮あまびく。顔つらくもあまびく。
 ある夜法師例の持佛堂。あまびく。誦経くもあまびく。あまびく。丹違真の
 あまびく。あまびく。今宵姫宮の夜寝あまびく。び入りておれ。事あまびく。
 ぢやと思ひ。あまびく。佛間をさへ。あまびく。のあまびく。あまびく。丹例の媒の
 おもく。人あまびく。山くぞ。思ひて手をさへ。引く。法師思ひ。けく。ねく。
 て。ひく。行く。あまびく。のあまびく。つ。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 法師のあまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。

あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。
 あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。あまびく。

あけくけ戸あけぬとしか内丹女房の夢多き何事ぞといひて戸を明つ
 まま丹次盗人の入りてゆとしか何事なる車のゆをんとしかあるを法師耳
 丹もいざむさあをち奥をさしてさし入ぬ姫宮のおがりのあまこ丹
 山人が衣をそそ忍びるゝるを見るより引とく小腰丹のまをゆを
 方一かけ素りく盗人のけとりてぬといひさる膝の下ふひきまきこり
 敵居
 かくいこくもはしきつといふおろろ弦かしてまをる夜行のくを
 叫てまをひつらしきといひき内階より引おろせがむがて高き手
 くらあげつ先何者ぞつらを見よといひを頭巾をぬがせく見るふ色白く
 よき男あり見たりける物やあるしづくの者ある水くくせて白状させよ
 といふけさこぎ大方あるねをありとあるく馬部吉上のいづくま
 走り素きのまるとよむ其の中清士の宗太をさすやうて見ていひくち
 けぬきんいひしき屋の清士山人と者ありといふさばおさるよとく
 あまこの雑色志のをとりあげカ子まきせとつあをきあし
 ひとの流流男死く芝生の露とや消ぬんとあらしあるくを夜きとも
 まづ法師いひまき高きつとく佛間入るるが夜あけぬま
 むんとて庭丹素りていふ盗人の白状するあやと仰々雑色らら
 かざりけはよくおゆども今ふ白状仕るまふとまきあつありといふとかく
 まるあど丹あけをさきて在方あども飛びちぐひあく猪名部墨縄の今ある
 宿所ありそ臥くるが山人がとくらまきくさあ見るありとつて警馬
 走り素き一目見るより雑色ららむらひてあま何ものう生どりといひた
 法師志より顔おの生生どりてぬといふ墨縄がのさくけ者盗まはま
 人あむぎかどて捕つひといひた法師まきしとくかまが物なすはんと

あまこの雑色志のをとりあげカ子まきせとつあをきあし
 ひとの流流男死く芝生の露とや消ぬんとあらしあるくを夜きとも
 まづ法師いひまき高きつとく佛間入るるが夜あけぬま
 むんとて庭丹素りていふ盗人の白状するあやと仰々雑色らら
 かざりけはよくおゆども今ふ白状仕るまふとまきあつありといふとかく
 まるあど丹あけをさきて在方あども飛びちぐひあく猪名部墨縄の今ある
 宿所ありそ臥くるが山人がとくらまきくさあ見るありとつて警馬
 走り素き一目見るより雑色ららむらひてあま何ものう生どりといひた
 法師志より顔おの生生どりてぬといふ墨縄がのさくけ者盗まはま
 人あむぎかどて捕つひといひた法師まきしとくかまが物なすはんと



法師仕丁の山人をせしむ
むちろつて、困るは来て
伝作の悪事を見
あつて、退く
かゝる

江戸のしやんせう

する。を。おの。見。見。お。せ。て。盗。人。と。声。け。け。や。入。り。し。ま。だ。か。を。口。あ。け。ま。つ。負。の
 な。さ。み。み。く。ゆ。ゆ。の。さ。せ。ゆ。と。や。て。ゆ。だ。盗。人。子。相。違。あ。し。し。清。士。の。宗。彦
 も。雷。より。答。ら。ち。て。あ。い。る。口。を。さ。し。物。を。盗。入。り。し。ま。だ。と。い。ふ。墨。繩
 の。ま。つ。よ。も。法。師。の。妄。語。の。ゆ。え。と。い。ふ。よ。く。か。ま。づ。ま。づ。盗。人。あ。り。と。名。の。り
 の。ま。つ。お。か。つ。て。宜。だ。法。師。宗。彦。口。を。さ。ろ。う。て。お。き。入。り。と。名。の。り。よ。お。違
 あ。し。會。を。し。し。ま。づ。宜。だ。入。り。と。い。ふ。墨。繩。か。し。り。と。笑。ひ。と。ま。さ。い。お。の。れ。が
 作。り。し。刑。官。子。あ。り。し。る。木。偶。あ。り。木。偶。の。物。り。し。ま。づ。お。き。入。り。あ。し。し。か。ぞ
 あ。し。い。と。ま。い。見。よ。と。て。ち。ひ。さ。ま。銘。と。り。出。し。春。の。あ。い。り。を。さ。し。し。ひ。ま。て。葉
 あ。ば。を。ひ。し。つ。ら。み。は。ら。と。出。し。て。法。師。が。あ。し。ま。ん。せ。し。し。け。つ。法。師。の。あ。ま。ね。く
 口。ち。の。ま。づ。難。色。ら。る。も。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ひ。く。よ。ぶ。より。あ。ら。る。骨。を。折。り。て。白。状
 せ。よ。と。む。ち。ら。ち。つ。の。丹。物。の。さ。ざ。る。さ。ら。道。理。を。ま。し。と。顔。見。あ。せ。せ。く。笑。ひ

出。し。し。和。ら。く。は。ま。の。石。藤。卷。あ。け。て。女。房。し。ち。は。め。の。と。勾。欄。の。の。り。と。り
 し。も。つ。て。刑。官。の。あ。し。し。大。事。と。志。の。し。入。り。形。と。り。あ。し。は。ら。の。と。あ。し。と。ま。い。庭
 子。引。お。ろ。む。ち。ら。ち。と。く。い。ま。い。と。あ。し。は。ら。者。と。も。お。ひ。あ。し。と。の。勅。諭。ぞ
 と。く。内。所。を。ま。ら。く。出。す。と。い。ふ。法。師。の。い。の。り。と。り。宗。彦。も。色。を。か。て。あ。し
 出。し。墨。繩。法。師。の。ら。ら。向。ひ。し。け。本。偶。子。物。り。と。せ。め。の。り。と。お。の。ま。が。細。工。は。ま。ら。り
 し。る。虫。貝。僧。の。法。力。か。ら。い。だ。い。お。ま。く。つ。り。僧。の。の。り。と。り。ま。し。し。し。行。を。心。す。の。り
 お。た。し。し。し。下。と。い。ふ。繩。と。り。出。し。法。師。が。脊。子。か。の。人。形。を。く。り。し。け。て。又。宗
 彦。を。さ。し。見。て。お。の。ま。い。雷。より。け。木。偶。を。む。ち。ら。ち。と。り。法。師。が。骨。人。と
 見。て。し。し。法。師。が。骨。と。く。送。り。ゆ。け。と。て。宗。彦。を。繩。ゆ。て。お。ま。い。あ。し。と。り。の
 の。繩。を。法。師。が。勝。り。く。け。け。つ。清。士。ら。あ。ら。る。骨。口。を。あ。げ。て。勅。諭。の。の
 し。も。お。ろ。く。内。庭。を。ま。ら。り。け。け。し。と。あ。し。つ。の。丹。物。の。者。の。心。も。取。り。し。と。思。ひ

着る法師のたある笈を肩ひて行勝をまへへり。あがき錦杖を引さげ
 て何うて出ぬ。あやと見てあまはけ修行者車をとめてあゆみ行きぬ。
 あまの盗人あやと見ゆもかまが破るるな垣よりやうんとしひあさせ
 たるもど館のうち俄にささぐくくんとちがひてなぐ舟何ぞとて
 よびて走りあへくまどしたあつてあまが中間男かの破まける垣のゆ
 より出くまよりの出ぬつらん。あまちうあつて何事ぞと宣が中間
 息つまはけ。姫宮の今のもど見よせめをさげは館のたさぎ大なるあま
 とのひさぬろねをううてなぐ入ぬ。今この修行者の奪ひあつて
 笈よひきて逃つるあま。さるいぬの月おひさし。横川の法師あま
 あんひつとつて奪返してんと。松光もともぐみ跡を道ひておひりけ
 る。夜もあふけこつてふー待の月高ののりて。ひらくとあまよがうま

何うかありぬ山人松光の息つまあまをさるるが。かけうとておひつま
 二人とてやうと組つま。修行者二人をつまのけ。錦杖を頭。舟がさ
 うつさかる。あまも刀ひきぬま。たぐひ舟ま。おあひり。笈の固子
 姫宮のた夢あま。泣の事かぎりあ。たぐひよ力をつ。て。ひり
 る。覆面もつり飛ちり。修行者が笠も地舟透ぬ。折くゆき出る。雲
 の月の掲馬よ。雲りゆ。山人が。あま。刀を錦杖。うけよ。む。船
 ま。顔を見あさせ。汝の竹笠の山人。あま。舟あ。あま。敬
 まか。見ま。あま。舟。あま。石濱。ある。船主法師。あり。あま。敬
 事。大か。あま。松光も刀をま。ま。た。う。一。事。よ。た。が。ひ。舟
 金事をぞ。よろ。あま。山人。先。あま。知。得。か。ま。何。と。て。法師。の。法。師
 西。姫宮。を。奪。返。して。退。の。ま。ん。と。は。志。あ。つ。る。子。細。承。り。ん。と。の。ま。船。主。笈。を

地ふあろ〜戸をひくまて姫官をゆゑなる。姫官まうび出ぬひて。まろと都
 ようの武士どもの追奉るあんと思ひける。丹をゆゑも奉るゆゑつるあんと山人
 おさざりて泣ぬ。船主漢をさうくしてまぼ〜て老朽する。けは法師が姫官を
 奪ひて何あうせん。この女のよと丹誘ひなり。夫婦とあうあんとおまそ
 か〜いたるらつとつとら〜まのよく不審を思ひける。おのき姫官よ思ひあひ
 事〜事ゆいでと〜あせぬはける。と官か船主のよく後せまあむひ
 我回国修行の身とあう〜と。婿が造福の〜めある事ゆゑなるの知る
 不あり。さ〜むば夜とあ〜く。昼とあ〜く。飯とあ〜く。ま〜と。びとと。丹娘とあ〜く。さきか
 佛果菩提と。や〜あ〜と。時とあ〜く。又佛魏稱する。度おとよ。不便なり死を
 させ〜事よと。後悔せざる。折もあ〜。今の天堂もや生を〜と〜ん。但あ〜と
 の迷ふ〜と。地獄の苦患や受らん〜と。一時行時も婿が事おもひぬ。ゆゑ
 時〜あ〜。さ〜と。の使道と〜ぬ。我子の眷おも負〜と。憤良のゆ〜と
 言の垂る。我身の圍はおひぬ。さ〜きぬ。丹子をま〜と。ふ。け野のま〜と。
 指さむせぶ夜の鶴も。身のおろ〜と。いま〜と。かくて諸国をさ〜と。
 一昨日岩崎野の辻堂に夜をあ〜と。ける丹眠るともおふえぬ。さ〜ら
 中ふ娘と〜と。さきか姿我目のま〜と。顕出さ〜と。よろこび〜と。顔色めで佛
 天〜と。たがゆ〜と。をあ〜と。さ〜と。び生を〜と。仙と〜と。蓬萊子生を託さ〜と。せ
 のひぬ。女一の宮と山人君のゆ〜と。宿世の仙縁にて永世夫婦の契おとせ〜と。
 塵縁と〜と。させぬ〜と。ゆ〜と。蓬萊子至りのゆ〜と。ぬ〜と。其時〜と。ら〜と。諸
 との丹簾の幕をとりてつ〜と。ん〜と。親人を〜と。け姫官をみら〜と。びま〜と。山人君
 子おろ〜と。せの〜と。け婚姻成就せ〜と。と〜と。が勇あ〜と。ち〜と。よろづの造福作善よ
 ま〜と。ぬ〜と。と。のよ〜と。あ〜と。さ〜と。ぬ〜と。と。東丹出〜と。と。ら〜と。を〜と。



山崎の屋敷



舟主法師
碓氷野の
止堂子
いづれ
狼の哭子
あふ不

三界萬靈塔

鎮座 山崎 菅原

かく子姫宮は母の息子の里弟よりつゝのひぬおのまきふを春乃比
 比は息子の館にまゐりて墨繩の作りし。異沙門天の像をあづけあり
 つまじまをよせむとあては館に行きし。小尊敬の事かまじり
 かく寝殿下びのむひてさるぐあつてつらひめ。ひまを見あせせ
 姫宮はさうぢを告なるゆめよりさありの心あやむをくさんよま
 さうくこのめいた。曾あみをさひおのゆみ思をせあり。あは近は
 まつるあま。あまの對面しつゝ。あまも佛神の加護ある。やあ
 をごは。物が。山にけし。ひむう。まが事を思ひ出さ。あけら
 目もあう。ふ船主が。あばを。穿て胸ひくまぬ。心地ぞ。さる。さう。ば
 より姫宮の。供してあづま。ま。さ。あ。の。船主が。あ。あ。の。ま
 いて。あ。黒繩。の。の。あ。到り。け。あ。語り。跡。より。あ。但。あ。

ころい。日敷を。う。藤の。空子。姫宮の。供。は。途。中。人。や。あ。あ。ま。ん。け。あ。あ。可
 の。ま。を。り。て。人。目。を。は。み。て。下。し。ま。よ。の。ふ。さ。う。バ。再。會。の。時。ま。で。い。ま。と。さ。り
 め。く。お。を。せ。よ。と。た。び。ひ。子。別。を。惜。こ。つ。姫。宮。を。後。お。入。ま。さ。り。松。光。負。く。出
 ころ。時。あ。ひ。ひ。も。よ。う。ま。松。う。げ。より。横。川。の。法。師。清。土。の。宗。彦。刀。を。ぬ。ま。て。
 を。り。出。姫。宮。を。つ。せ。と。の。ま。う。つ。山。松。光。子。ら。つ。て。か。る。船。主。法。師。錦。杖
 ころ。て。兩。人。が。足。を。あ。あ。く。ま。だ。其。ま。横。た。た。ま。さ。あ。つ。が。う。ら。山。人
 ね。よ。意。趣。あ。る。の。と。お。ぶ。え。う。ら。あ。の。船。主。は。ま。り。せ。さ。お。の。く。い。と。く
 の。ま。が。ま。よ。し。ひ。さ。な。法。師。が。眷。お。ひ。あ。と。り。て。松。光。子。ら。つ。て。左。傍。の。人
 の。姿。を。負。し。ん。ん。人。もの。が。う。や。せん。あ。ま。着。て。と。く。行。ま。の。ん。と。手。を。か。ま。て
 催。せ。が。う。ら。も。氣。づ。り。う。思。い。も。後。追。ま。る。ん。の。ぞ。あ。る。と。心。せ。う。ま。つ。松。光
 め。ろ。と。も。足。を。あ。あ。り。て。靴。か。多。の。方。つ。の。ま。が。う。け。橋。を。つ。く。る。時。松。光

あつては橋を一回かたり板をたぎちてをりや行まぬこれハ
跡より人の道かける事んとの志〜〜あつて〜

匠物語ヲ讀ム諸君ニ呈ス

世ニナキ事ヲ綴リ合ス。諷史小説家ノ常ト異氏
是ノ本ノ作者程世ニナキ事ヲ綴リ合スノ馬鹿ノ
甚モキ者アラズ世トテ誤ラセハノ甚モキヲ
喜フトハ是ノ本ノ作者ヲ云ハズシテ何ニゾ
我依テ替ヘルニ狂句ヲ以テス諸君注目ガツカ

飛彈匠物語卷之五終

しつせんりのろほん 正へん

